

アジア・フィールド実習 参加学生レポート

コロナ禍での大学の講義における変化と取り組み

長山 進也
環境動態学専攻

コロナ禍においては、大学での学生の学びに様々な変化があった。今回のアジア・フィールド実習も、初のオンライン形式での開催となった。そんな中で、滋賀県立大学、ボゴール農科大学、サント・トマス大学の3大学の先生方から、各大学での学生の学びについてどのような変化があったかが紹介された。いずれの大学でも、遠隔で講義が行われ、それに伴った講義内容の変化が生じている。例えば、滋賀県立大学の環境科学部の講義には、実験を行う講義が含まれるが、それらも講義のオンライン化に伴い、例年のように実験室に集まって行うような形式では実施できなかった。しかし、実験の材料を学生に郵送し、自宅で実験ができるようにするなど、新しい生活様式に即した方法で、学ぶ機会が提供されてきた。ボゴール農科大学の例では、昆虫の変態についての講義の中で、近所で採集したカマキリについて、学生が質問した内容に講師が答えたやり取りが紹介されていた。そのやり取りには学生の間でよく使われているチャットアプリが活用されており、遠隔であっても気軽に質問しやすい環境が作られているように感じた。実験を伴う講義においては、自分たちでテーマを決めて、自宅周辺で実験や研究を行っている例が紹介された。その一つとして挙げられていた、学生が自分のキッチンで菌類の培養のための培地を作成している様子が印象に残っている。実験室であれば簡単に揃うであろう機材も十分ではない環境で課題に取り組む様子には、創意工夫が見られて興味深かった。またボゴール農科大学の場合、コロナ禍における新しい生活様式を踏まえて、講義だけでなく、卒業のために必要な課題についても例年と異なる形で実施されていた。学部生は自宅周辺での野外調査や二次データの利用、文献のレビューなどを行い、大学院生の場合では室内実験と温室での実験については従来通り行うものの、野外調査に関しては自宅の近くで行うように変わったようであった。サント・トマス大学では、このコロナ禍を機に、学生の成績評価に関して、形成的評価を採用する試みがなされた。この評価形態では、これまでの知識の詰め込みやテストによって成績をつける結果重視の評価ではなく、その学習の過程に重きを置いている。例として紹介された、評価に用いられた課題には、科学に関する用語について自分自身で理解している内容を書かせるものなどがあった。この評価形態を採用することにより、学生の成績も向上したようである。このコロナ禍を、変わりゆく学生の学びについて考えるきっかけにしていくことも重要だと感じた。

各大学のコロナ禍での学びに関する取り組みを聞いて、変化を前向きにとらえ、既存のものをより良く変えていこうとする姿勢は大切だと感じた。様々なことが制限されるコロナ禍において、それぞれの大学で多様な工夫がなされており、これまで以上に柔軟な形で講義が展開されているところが興味深かった。また、新しい生活様式に即した形で課される課題に対し、学生が工夫を凝らして取り組んでいる様子も面白かった。

今回はオンライン開催となった研究発表も、プログラムに含まれた。そこでは、私も自身の研究について発表を行った。英語での質問が聞き取れないこともあったが、何度か聞き返しながら、答えることができた。これは私にとって初めての英語での研究発表の機会で、良い経験となった。プログラムで発表された研究は特定の分野に限らず、環境科学の分野のほか、工学部系の分野やコロナウイルスに関する研究などがあった。多様な分野から多くの発表が行われたが、オンライン開催であったからこそ、参加の機会に恵まれた発表者もいたかもしれない。そういった点は、オンラインで遠隔地同士をつなぐメリットだと思

う。

今回のアジア・フィールド実習は、対面形式の講義だけでなく、海外への渡航も制限される中において実施された。例年であれば海外の大学に赴いて行われるが、今年はオンライン開催となった。毎年行われてきたアジア・フィールド実習が、この世界的に厳しい状況の中でも途切れることなく開催され、それに参加できたことはありがたいと感じた。

4年ぶりのフィリピン、探究心が再燃した2日間

正木 美帆

環境政策・計画学科

<参加の動機>

4年前に訪れたフィリピンへ、同じプログラムを通じて、もう一度訪れたい。この想いが、本年度のアジア・フィールド実習へ参加した動機です。私は大学1年生の春休み、本実習を通して、初めてフィリピンへ赴きました。初の海外渡航であらゆることが初体験だったのですが、今でもひと際心に残っているのは、“1つの環境問題は、様々な社会問題が絡み合って発生している”ことを実感したことです。例えば、水質問題と一口に言っても、そこには廃棄物処理問題や経済格差、教育格差、政府の介入の失敗といった、根深くて複雑な課題が複合しています。また、その被害が深刻で、日本ではとても考えられないような環境に住んでいる人々にも出会いました。大学1年生だった私は、現地で、複合した問題を解きほぐしたかったのですが、質問をする力も勇気も持っておらず、もやもやした気持ちで帰国することとなりました。現在も力は乏しいままですが、4年間でかき集めた知識と観点をもって、もう一度現地に赴き、今度こそ質問をして、少しでも絡み合った社会問題を解きほぐすことが、大学4年生で成し遂げたい目標の一つでした。しかし、今年度は新型コロナウイルスの拡大という、世の中を変えるような出来事が起こり、その目標を達成することは叶いませんでした。本当に悔しかったのですが、オンラインという形で、フィリピンと滋賀県立大をつなぐ、第4回UST-USPシンポジウムを開催していただき、現地訪問に劣らないくらい、有意義なアジア・フィールド実習を経験することができました。

<ポスター発表を通して学んだこと>

私は、せっけん運動と菜の花プロジェクトの取組について、ポスター発表をおこないました。準備段階から発表当日にかけて、学んだことが2つあります。

1つ目は、フィリピンが抱える社会・環境問題について議論するために、まず日本を知ることが重要であるということです。質疑応答では、「フィリピンの問題を考える上でも重要な事例である」と、企業の対応や、他県への波及効果といった観点から、いくつか質問をいただきました。どの質問も社会運動を考える上で重要な観点だったのですが、事前準備段階で、それらの観点到着目できておらず、十分な回答ができませんでした。この経験から言えることは、自分の国の事例で着目できなかった観点は、フィリピンの事例に出会ったとしても、同様に着目できないだろうということです。しかし、もし自分の国の事例を十分に理解して議論する力があれば、他国の事例であっても、既知の知識を応用させて議論展開ができます。上述のように、アジア・フィールド実習に参加したのは、フィリピンが抱える環境・社会問題を自ら解きほぐしたかったからです。この目標を達成するために、まずは自分が今まで住んできた日本、そして滋賀県を知り、考えを巡らせることが大切であることを学びました。

2つ目は、内容の興味深さと、簡潔かつ明快な発表が、良い発表であるかどうかを左右するという事です。フィリピンの皆さんの発表は、研究内容はもちろん、ポスターやスライドも見やすく、そのクオリティの高さにおもわず、なぜそのような分かりやすい資料が作成できるのか質問をしてしまいました。彼らは質問に対し、何度も発表経験があるからだと言っていたのですが、私は、設定したテーマを調査して他の人に知ってもらおうというパッションの強さが、最も大きな要素ではないかと思っています。なぜなら、新しいことを知りたい、他の方から意見をききたい、という探求心の強さをひしひしと感じたからです。そして、そのパッションは、様々な人とのディスカッションから生成されるのだと思います。本シンポジウムも、パッションを生成する貴重な場の一つであり、私も、もっと色々なことを知ろう、考えようと探求心を掻き立てられました。この探求心を失わず、次の発表の機会では、フィリピンのみなさんのように、内容の興味深さと、簡潔かつ明快な発表ができるよう、意識していきたいと思っています。

<その他発表を通して学んだこと>

2日間にわたったシンポジウムでは、新型コロナウイルスに関連した発表が多くみられました。そんな中、私が最も印象に残ったのは、英語から現地語への翻訳に関する研究です。現在、フィリピンの教育現場では英語が使用されることがほとんどなのですが、医療現場といった実践の場では、十分な英語教育を受けていない人々と関わることが多く、現地語でのコミュニケーションが要求されます。しかし、教育現場では英語のみの使用で、現地語に翻訳されていないため、実践の場でコミュニケーションが交わせないという問題をかかえているそうです。特に、病院といった緊急性の高い現場では、コミュニケーションに障害があると大問題であることは容易に想像できます。鎖国によって海外文化との融合が少なく、植民地となった歴史もない日本ではみられない特有の問題です。英和辞典ならぬ英-フィリピン語辞典も存在しないのでしょうか。言語問題は、今後フィリピンの理解を深めていく点で、重要なトピックとして注目していこうと思います。

<今後について>

本シンポジウムは、現地に訪れる経験に劣らないほど、刺激的でした。そして、刺激を受けたからこそ、もう一度この目でフィリピンをみてみたいという想いが大きくなりました。もうしばらく、今まで通りの移動が制限される日々が続きますが、この海外に対する欲深さを忘れず、まずは国内で、知識と経験を磨こうと思います。

フィリピンにおける COVID-19 のワクチン忌避

石原 大雅

生物資源管理学科

私が 4th UST-USP Joint Symposium の発表において特に関心を持ったのはフィリピンにおける COVID-19 のワクチン忌避に関する発表 (Combating COVID-19 Vaccine Hesitancy in the Philippines with a Science - Based Public Awareness Information Campaign) であった。発表では初めに、全国オープンアクセス調査で 15651 人の一般のフィリピン人に対し「フィリピンでワクチンが利用可能になったら使用するか」「中国やロシア、アメリカ、ヨーロッパのうちどの国のワクチンなら好んで使いたいか」「ワクチンについて何を危惧しているか」「多くの人、または政治家がワクチンを打った場合は自分もワクチンを打とうと思うか」という質問に図 1～4 のような結果を得られたことを示した。さらに、1116 人の医療従事者に対してもワクチンを使用するかという質問をし、図 5 の結果が得られたことを報告した。私は、この結果より、一般のフィリピン人が抱くワクチンに対する不安や疑心感は日本と殆ど変わらないことに驚かされた。日本は特にワクチンに対する警戒感が強いと考えていたためである。また図 3 より、フィリピン人がワクチンで危惧している一番の要素が偽ワクチンであることも非常に興味深いと感じた。これはフィリピンで狂犬病の偽ワクチンによる事件が多数起こっていることが要因に挙げられると考えられる。

続いて、発表では COVID-19 の研究ポスター作成や、ワクチン接種を促すポスターの作成、Facebook、Twitter、Instagram での情報の発信といった新型コロナへの UST の対応についての紹介がされた。これに関して、私は、このような取り組みを行っている日本の学生団体はあまり見られないため非常に関心を持ったと同時に、このような活動が日本で増えていくためにはどうすれば良いかを考えさせられた。

最後に、本来はフィリピンに行って交流を行う予定がオンラインでの開催となってしまったが、それでも非常に刺激的な 2 日間のシンポジウムになったと私は考える。

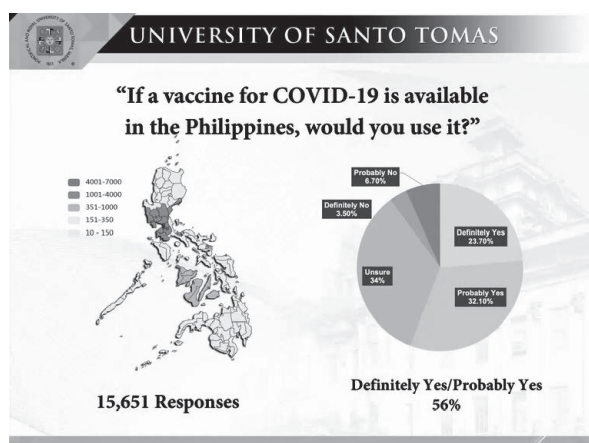


図 1. もしフィリピンで COVID-19 のワクチンが利用可能ならあなたは利用するか。
 使う 23.70%、多分使う 32.10%、わからない 34%、使わない 3.50%、多分使わない 6.70%

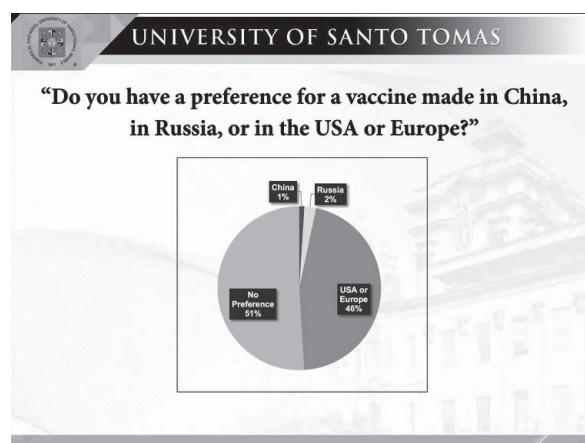


図 2. 中国産、ロシア産、アメリカ産又はヨーロッパ産のワクチンのなかで好みはあるか。
 アメリカ又はヨーロッパ産 46%、どれでもよい 51%、中国産 1%、ロシア産 2%

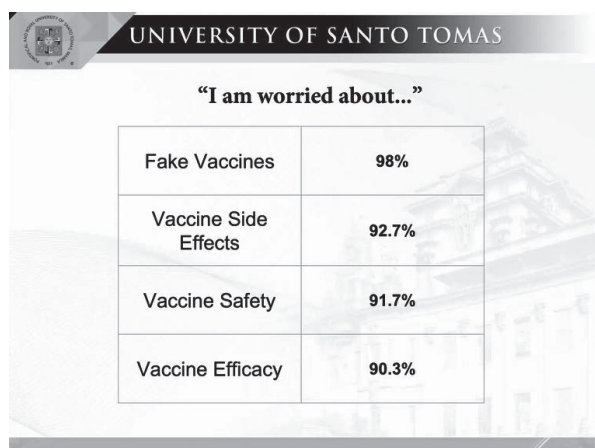


図 3. ワクチンについて何を心配しているか
偽ワクチン 98%、副作用 92.7%、安全性 91.7%、有効性 90.3%

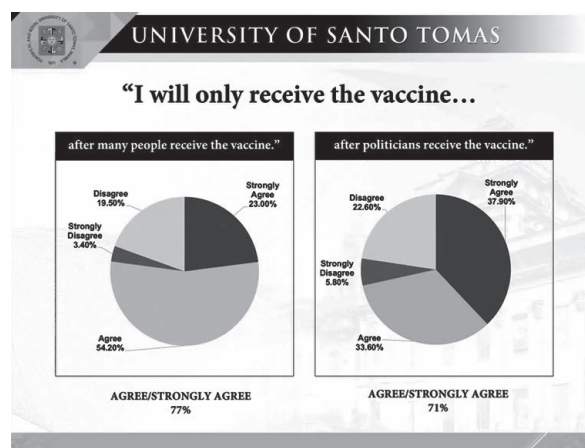


図 4. 多くの人が打った場合、または政治家が打った場合、自分も打とうと思うか
多くの人が打った場合：強く思う 23.00%、思う 54.20%、思わない 3.40%、あまり思わない 19.50%
政治家が打った場合：強く思う 37.90%、思う 33.60%、思わない 5.80%、あまり思わない 22.60%

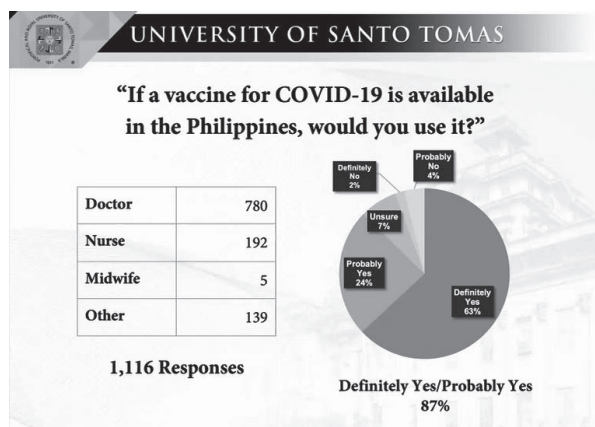


図 5. (医療従事者のみが対象) もしフィリピンで COVID-19 のワクチンが利用可能ならあなたは利用するか。
利用する 63%、多分利用する 24%、わからない 7%、利用しない 2%、多分利用しない 4%

4th UST-USP Joint Symposium の参加レポート

和久田 捷斗
工学部材料科学科

フィリピンでのコロナウイルスのワクチンについて。フィリピン人のワクチンに対するアンケート（ワクチンを打ちたいかなど）を紹介していただいた。私は、日本は他の国よりワクチン接種に対して積極的ではないイメージを持っていたが、フィリピン人の方もワクチン接種に積極的でない人が多かった。やはり副作用が気になるという人が多かった。自分のイメージと実際の状況の差が分かり、とても興味深い研究だった。

滋賀県立大学の先生方にはそれぞれの遠隔授業で講義がどのように変わったかを紹介していただいた。フィールド実習ができなくなるため家の近所を題材とする、木を使えないためペーパークラフトで工作し

てもらなど工夫をして講義をされていた。対面授業と同じくらいの質の講義をするのは、とても大変だと改めて感じた。

シンポジウムの参加者がいくつかのグループに分かれ、サント・トマス大学の学生と話をすることがあった。私は英語が苦手なため積極的に話に入ることができなかったが、サント・トマス大学の学生が質問をした時「ハヤトはどう？」と言ってくれた。初めて話をした海外の学生が、周りがよく見える優しい人で良かった。海外の学生と話してみたかったから、とても良い機会になった。

私は英語で琵琶湖の紹介プレゼンをした(図6)。琵琶湖についての知識が全然なく、さらに英語で説明をしなければならないため大変だった。私のプレゼンについて質問をしてくれた人がいたが、パニックになってしまい答えられなかった。先生に助けをいただいたが、その後チャットのダイレクトメッセージで質問をしてくれた人に謝罪と補足のメッセージを送った。そうしたら、相手の方が「全然気にしないで! 補足してくれてありがとう」と送ってくれた。質疑応答の場面でも質問に答える人が「質問ありがとう」と言っている人がほとんどだった。とてもいい文化だと思う。今までは質問されたら答えるだけだったが質問してくれてありがとうと言えるようになりたいと思った。良い刺激を受けることができた2日間だった。このシンポジウムから得たことを今後活かしていきたい。

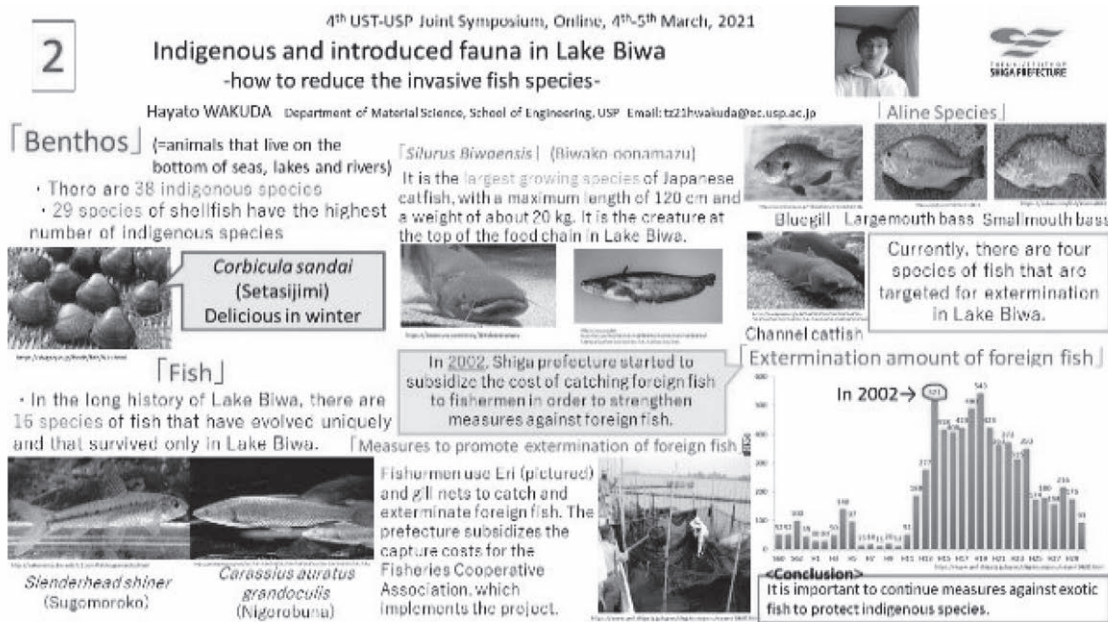


図 6. 筆者のポスター発表